

『源氏物語』 葵巻におけるもののけ描写について

— 加持を中心に —

井 内 健 太

序

古代において、死霊・生霊などの霊物やそれらがもたらす特定の人間に対する祟りを「もののけ」といった。中古の文学作品には、人が病気になったり、体調を悪くしたり、命を落としたりした際などに、その原因をもののけが憑依したことによるものとする、あるいは病気それ自体をもののけと表現する例が見られる。

『源氏物語』にもものけは印象的に描かれており、光源氏に連れて行かれた廃院で夕顔が死ぬ場面（夕顔巻）や、身重の葵の上に憑依し、六条御息所の生霊として現れる場面（葵巻）などは、メディア化されたり、高等学校の国語教科書にも取り上げられたりしており、人口に膾炙している。陰陽師などとともに今日でも人々の関心を強く惹きつけるもののけであるが、もののけは本来、

霊物である「物（もの）」の「気（け）」、すなわち目に見えず漂うものとして人間に作用するものであり、⁽¹⁾『源氏物語』が成立した撰定期において一般的に視覚で捉えられる性質のものではないことなど、その実態の正確な理解については研究のレベルと世間の認識とは大きな乖離が存在するのではないだろうか。また、研究においても未解明な部分が存在する。

もののけは『源氏物語』研究において重要なテーマの一つである⁽²⁾とともに、日本史学・宗教学・民俗学・文化人類学・怪異研究・医学史研究等々の分野でも研究が進められ、近時ものけやその対処に関する実証的研究が陸続と発表されている。⁽³⁾『源氏物語』におけるものけの問題については、先学によってすでに多く論じられたが、これら他分野の成果をも踏まえて、改めて『源氏物語』におけるものけを検証する素地が整いつつあると考える。

先行の『源氏物語』研究における議論の中心は、夕顔巻に登場する霊の正体についての考察⁽⁵⁾、六条御息所論と関わる生霊化の問題⁽⁶⁾、構想論や主題論とも関わる繰り返される六条御息所の霊の登場が物語内でどのような意味を持つかという問題⁽⁷⁾などであった。本稿では、『源氏物語』において登場人物たちに病悩をもたらすもののけ、及びそれに対する宗教的治療として行われた「加持」の描写に特に注目したい。「加持」を中心とするもののけへの対処法については、近時他分野での研究が大きく進んでおり、また、これまでの『源氏物語』におけるもののけの研究においてこの視点から分析を行ったものも少ない。

平安時代、疾病の治療にあたっては、陰陽道による占・祭祀、漢方医学に基づいた投薬・鍼灸、神仏への立願、仏教による読経・修法・加持などの多岐にわたる手段がとられた。病気の原因に依りて治療法はある程度定まっており、陰陽師の占によって病気の原因がもののけであると判断されると、もののけの調伏が行われるようになる。仏教の普及・浸透に伴ってもののけに対しては修法・加持による調伏によって解決を図るのが平安貴族たちにとって一般的となる。加持は、密教の修行を積んだ僧が呪法によって霊に正体を名乗らせ、調伏する儀礼である。その際、ヨリマシと呼ばれる霊媒が据えられ、一度、霊をヨリマシに移してから調伏

する例が見られる。「ヨリマシ加持」は『枕草子』『紫式部日記』や以後の時代の記録類に表れており、もののけに対する治病方法として定着していたようである。

『源氏物語』が著された時代の前後では、ヨリマシ加持はそれが確認される文献資料に乏しく、その成立がいつまで遡るのか等の問題があり、中古における具体的な実態の把握が難しいという状況がある。そのような中、『枕草子』二三段（以下、三巻本による）でのヨリマシ加持描写に見られる「護法」が注目される。験者が護法童子と呼ばれる鬼神を使役し、護法童子が病者に憑依している霊物を責めてヨリマシに移させるといふ調伏のプロセスがあったことが唱えられた⁽⁸⁾。また、上野勝之氏は、ヨリマシ加持の起源について、密教經典に記されている「阿尾捨（奢）法」に由来するといふ説に根拠を与えつつ、冷泉朝期にその方法が整えられたと推測している⁽⁹⁾。さらに、徳永誓子氏は、一一世紀末から一四世紀にかけてのヨリマシ加持を調査し、貴族社会において一三世紀前半までは貴顕に仕える女房などがヨリマシに用いられ、その後ヨリマシとなるミコや「物付」と呼ばれる職業的ヨリマシが登場する過程について論じている⁽¹⁰⁾。古代において、ヨリマシ加持は本来目に見えないもののけを視覚と聴覚で認識可能なものへと変えることで、僧侶の調伏に説得力を与え、人々に安心感をもたらす

手段として求められたと考えられる⁽¹⁾。

後述のように、ものけは『源氏物語』以前の物語文学においてほとんど具体的な描写が見られず、『源氏物語』がその描き方を開拓した可能性は十分にある。次節以降、病氣としてのものけ現象及びそれに対する「加持」を中心とした治病の描写を中心に、『源氏物語』葵巻におけるものけの描かれ方と古記録などの歴史史料及び『源氏物語』に先行してものけを描いた『うつほ物語』や『枕草子』などの他の文学との比較を通して、そこに見出せる『源氏物語』に固有の方法について考察する。

第一節 『うつほ物語』における治病描写について

『源氏物語』に先行する『うつほ物語』では病としてのものけとそれに対する治病描写が見られるので、ここで確認しておきたい。

大将殿の宮あこ君、ものけつきて、いたくわづらふ。とかくすれども、怠らず。この阿闍梨につけ奉れば、かしくして勞りやめつ。阿闍梨、宮あこ君に、心うつくしく語らひてのたまふ。……阿闍梨、「など、かく勞りやめ奉る心ざしをも思さで。あひ思せとこそ思へ。」あこ君、難きことと思へど、参りぬ⁽²⁾。

右は吹上・下巻で源正頼の子息である宮あこ君がものけに患った際の描写である。様々な治療を試みても治らなかつたが、真言院の阿闍梨に任せられたばかりの忠こそが治療に当たると、すぐに治療することができた。「かしくして勞り」とある治病の方法は具体的に記されていないが、密教僧の忠こそによる修法や加持が行われたとみられる。治療を終えた後、宮あこ君の姉のあて宮に懸想している忠こそが宮あこ君に文の受け渡し役を強要しており、忠こそそのすぐれた験力が示される一方、出家後にもかかわらず恋の煩惱にまみれる姿が描かれている。忠こそが送った恋文はあて宮に一蹴され、忠こそその恋の滑稽な失敗談として話は終わる。

このような験者の描かれ方には注目される。『大和物語』一〇五段では中興の近江介の娘が「ものけ」に患った際、淨藏大徳が験者となり、治療にあたっているうちに娘と恋に落ちる話が描かれているように、俗的な一面もともに描かれることがあったのが当時の験者である⁽³⁾。また、『枕草子』二三段では、ものけの出現に際して招請された験者が「いみじうしたり顔」に加持を行うも一向に効験は表れず、匙を投げて寝てしまうのが「すさまじきもの」とされ、二六段でもものけ調伏に疲れた験者が眠り声で加持をする様子が「にくきもの」とされているように、調伏に手こずる験者が繰り返し戲画的に描かれている⁽⁴⁾。一方、一本二三段で

は加持にあたる僧が、「いと清げなる」姿で、「たふとし」とされる陀羅尼を読み、効験を示すと、「仏のあらはれたまへる」と思われるほどだとされている。『枕草子』は、験者の持つ聖俗の両面、特に俗的性格や必ずしも頼りにならない性質を強調する。『うつほ物語』における験者としての忠こそ描かれ方にも通じるものがあるだろう。

また、あて宮巻で妹のあて宮に恋をする仲澄が、あて宮の入内の際に重く患った際も忠こそは登場している。占によつて仲澄の病悩の原因が「女の霊」の仕業であるとされた後に阿闍梨の忠こそが病者のもとに召されている。一度「死に果つる」とされた仲澄は、あて宮から送られた文を伝えられた途端、息を吹き返す。源正頼はそれを「忠こそその御験あり」と喜んでいるが、後に「亡くなり給ひにしかど、御消息にかかりてありつる」とあるように、蘇生の要因があて宮からの文にあることは明らかである。その後、あて宮に歌を贈つて仲澄はあて宮の返歌が書かれた紙を飲み込み、「絶え入」ってしまった。絶命前後の場面では、忠こそら験者の姿は描かれず、実際には行われていたであろう「加持」「修法」などの治病描写も見られない。あて宮への恋に死んだ仲澄の姿を描くために、もののけやそれへの対処は後景に退けられているのである。

さらに、国譲・中巻における仲忠の北の方である女一の宮が懐妊し出産する場面では、その病悩の様子とそれへの対処の過程とが具体的に描かれている。

一の宮、五月より孕み給ひぬ。こたみ、いたく悩み給へど、大将の君には、さも知らせ給はず。ただ御心地悩み給ふやうにてあれば、思ほし騒ぎて、祭祓せさせ、所々にも御修法行はせ給ひて歩き給はず。

女御の君もおはしまさねば、夜昼、薬師、陰陽師、験者など召しつつかおはしますに、……かかるほどに、大将、入り給ひて、「今のほどは。薬師どもに問ひ侍れば、『熱などにやはすらむ』となむ。もの問ふには、『靈氣』とぞ。されば、真言院の律師のもとに、消息言ひ遣はしつ。参り来ば、護身せさせ奉らむ。……」とてまかりぬ。

懐妊によつて女一の宮はひどく苦しむが、懐妊の事実は仲忠には伝えられず、仲忠は祭儀・祓・修法など様々な対処を試みる。陰陽師の占いによつて「靈氣（りやうげ）」すなわちもののけなのでと診断され、真言院の律師となつている忠こそが召し寄せられる。陰陽師の占いの結果によつて治療の方法を決定するのが当時の貴族社会では一般的であったが、もののけ治療で主な役割を担う験者だけでなく、そこに招集された薬師・陰陽師までもを列挙して

描く点が『うつほ物語』の特色である。なお、「護身」は護身法という印を結び陀羅尼を唱えて心身を守護する修法で、『蜻蛉日記』『枕草子』などにも用例が見られる。

その後、女一の宮のもとへ参上した忠こそその加持が始まるが、出産の世話をする典侍が懐妊の事実を告げない女一の宮を責めて、「何の罪にてある御心地にもあらず。知らせ奉り給はねば、おとどは騒ぎ給ふ」と言う。女一の宮の体調の不良は単に懐妊によるものであり、靈物に祟られているなどの事態が生じているわけではないというのである。陰陽師の占いの結果には反するが、ここで女一の宮の病悩は「靈氣」によるものではないようであり、この後の場面でもものけは出現せず、ヨリマシ加持が行われた形跡も見られない。やがて、女一の宮が懐妊していることが仲忠にも伝わり、女一の宮を桂の別荘に移すことになり、忠こそも帰っていく。

国譲・下巻の終盤になり、出産の時期が近づくと、再び女一の宮の容態は悪化するが、そこで仲忠が様々に対処を施す姿が描かれている。「神仏」に安産を祈願し、所々で「修法」を行ったにもかかわらず、臨月を過ぎても産まれてこなかったため、評判の高い僧都・僧正を集めて「不断の御修法、七八壇」をさせ、真言院の律師・忠こそその「孔雀経の御誦経」がこれに加わる。『紫式部日記』

に見られる中宮彰子の出産に際しても「五壇」であったから、その規模の大きさが窺える。そして、宮中や左右の大臣らから諸寺に「誦経の使」が派遣され、女一の宮のもとへ左右の大臣らが集まる。さらには、仲忠は着物も脱がずに直衣の上から水を被って齋戒沐浴し、庭に出て「この人、え免れ給ふまじくは、おのれを殺し給へ。片時後らし給ふな」と言って大願を立てて転がりながら泣く。女一の宮を思う仲忠のひたむきさが大仰なほど情感を込めて描かれている。

女一の宮がいよいよ出産する際、仲忠は自ら女一の宮を抱き起こし、薬湯を飲ませようとする。

おとど、弓走り引きて、うち声作り給ふ。大徳たち近う候へど、加持高うもせさせ給はず、「弱き人は、それに惑ひ給ふものぞ」とて、みそかに読ませ給ふ。真言院の律師一人、いちはやく読む、いと尊し。

おとど、「かかる折には、人多く、な候ひそ。騒がし」とて、御湯度々参りて、弦打ちしつつ、声作り居給へるに、寅の時ばかりに、「いかいか」と泣く。驚きて、女御探り給へば、後のもの平らかなり。

右は出産の瞬間の描写で、鳴弦をする左大臣や加持をする大徳・忠こそたちが総がかりで女一の宮のために甲斐甲斐しく立ち働く

姿が描かれている。大徳たちが病人の身を氣遣つて声を控える一方、忠こそが激しく読経する声が尊いとされる。後産も無事に済むと、仲忠はそのまま女一の宮に「添ひ臥し」た。

当該場面ではもののけは登場しておらず、従来の王朝文学におけるもののけ研究の文脈では取り上げられてこなかったが、『源氏物語』葵巻のもののけ登場場面を考える上で重要であると考えられる。¹⁵⁾

『うつほ物語』では女一の宮の病悩の苦しみが描かれる一方で、それを霊の祟りによるものとはしていない。これは当時において出産の際の苦しみが必ずしももののけを原因とするものと解釈されるところとは限らなかつたことを示している。『源氏物語』はもののけとそれに苦しめられる女君たちを描くことで、嫉妬や怨恨といった人間関係を表しているが、これはその主題的要請に応じて物語に怪異を取り込んだ『源氏物語』の方法の一つであつたといえよう。『うつほ物語』において、その眼目は苦しむ女一の宮と彼女のために力を尽くす仲忠や周囲の人物たちを描くことにあるようであり、もののけの存在は描く必要がないものであつた。

第二節 葵巻におけるもののけ(一)

ここからは『源氏物語』におけるもののけとそれへの対処として加持などが行われる描写をみてゆく。本稿では葵巻を中心に論

じるが、夕顔巻において廃院で夕顔をとり殺した靈物についても簡単に触れておきたい。夕顔は廃院で急死した後、源氏は阿闍梨を要請し、「誦経」(①一七〇)¹⁶⁾などの手配や立願を惟光に求めているが、阿闍梨は昨日比叡山に赴いたと言われる。こうして修法や加持は行われず、東山で葬儀が行われた。一方、廃院の靈に触れた源氏は、頭痛や熱の症状に苦しみ出し、東山で夕顔の亡骸に接した後も重く患い、「御祈祷」、「祭、祓、修法」(①一八一)などがさまざまに行われ、二十日余りのち体調を快復している。人々から「御もののけなめり」(①一八三)と見られており、描写こそないものの、もののけ調伏の加持も行われたのかもしれない。

また、夕顔巻での大病との関連は語られていないが、源氏は続く若紫巻冒頭においても「瘧病」(①一九九)を患っている。「瘧病」とは周期的に発熱などの発作を繰り返す病気のこと、マラリアに似た熱病である。治療のために北山の聖のもとへ赴いた源氏には、「さるべきもの作りて、すかせたてまつる。加持などまゐる」とあり、梵字の書かれた護符を飲ませ、加持を行うといった治療がなされている。上野勝之氏が古記録の調査によつて明らかにしたように、瘧病の原因と考えられた瘧鬼は「邪気」とは区別されており、その対処法も異なつていてヨリマシを用いた加持は行われないのが通常である。¹⁹⁾若紫巻でも北山の聖は「御もののけなど

加はれるさまにおはしましける」と述べており、瘡病にものけが加わった様子であるという聖の見立てが示されていて、両者は区別されている。⁽²⁰⁾『小右記』長和三年四月十四日条で藤原道長が患った際に「初似瘡病、至今他祟相加敷者」と記述されている例があるように、瘡病に他の「祟」が加わることもあった。

夕顔巻での廃院の霊は一貫して「もの」として登場しており、森正人氏が指摘するように、その存在は物語中でもものけとして認識されていない。⁽²¹⁾また、夕顔巻・若紫巻における源氏の病悩は「ものけ」である可能性は示唆されるものの、ものけ調伏として行われるはずのヨリマシ加持の描写はない。『源氏物語』におけるものけの本格的な登場は葵巻以降に見られる。

葵巻では、車争いの後に懐妊中の葵の上が重く患い、先述した『うつほ物語』のようにそれが単なる懐妊時の苦しみであるとはされず、ものけ等を原因とすることが語られている。

大殿には、御ものけめきていたうわづらひ給へば、誰も誰も思し嘆くに、……心苦しう思し嘆きて、御修法や何やなど、わが御方にて多く行はせ給ふ。ものけ、生霊などいふもの多く出で来てさまざまの名のりする中に、人にさらに移らず、ただみづからの御身につと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしうわづらはし聞こゆることもなければ、また片時離

るをりもなきもの一つあり。いみじき験者どもにも従はず、執念きけしきおぼろけのものにあらずと見えたり。(②三一)

三二)

前節で見た『うつほ物語』での女一の宮の出産場面ではものけの関与が否定されていたが、右の場面では葵の上の病悩の原因がものけにあることは確定した語りになっている。ものけの兆候が見られると、光源氏によって修法などが行われ、ヨリマシ加持が行われることになる。この場には薬師・陰陽師も召し集められているはずであるが、それは描かれない。あくまで、ものけとその対処に焦点を絞って語っていくのである。葵の上を苦しめる霊物は複数存在し、一体ずつ名乗りをして調伏されていくが、その中の一体がヨリマシにも移らず、正体を現さない。光源氏の愛人たちの関与が噂され、占(ものなど問はせ給へど)が行われるが誰の霊かは判別しない。『源氏物語』成立の時期において、古記録に見られるものけはその正体が記されることの方が少なく、記録者がその名をあえて記さない事例を除いては、調伏がうまく行われずにもものけの正体が特定できなかったのだろうと考えられる。先述のように、『枕草子』ではヨリマシ加持の失敗を験者の失態として揶揄するように描き書きぶりが見られたが、ここでは葵の上にとりついた霊の「執念きけしき」の表れとして

説明され、その調伏の困難さはもののけの執念の深さへと転換されていく。⁽²⁴⁾

第三節 葵巻におけるもののけ(2)

この後、一方では六条の御息所の苦悩が描かれ、葵の上においては、出産の時期が近づくと、もののけが再び登場してくる。

まださるべきほどにもあらずと皆人もたゆみ給へるに、にはかに御気色ありてなやみ給へば、いとどしき御祈祷数を尽くしてさせ給へれど、例の執念き御もののけ一つさらに動かず、やむごとなき験者ども、めづらかなりともて悩む。さすがに、いみじう調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、「少しゆるべ給へや。大将に聞こゆべきことあり」とのたまふ。「さればよ。あるやうあらん」とて、近き御几帳のもとに入れ奉りたり。むげに限りのさまにもおし給ふを、聞こえおかまほしきこともおはするにやとて、大臣も宮もすこし退き給へり。加持の僧ども声静めて法華経を誦みたる、いみじう尊し。⁽²⁵⁾
三七〇三(八)

このもののけは「やむごとなき験者」たちをして「めづらかなり」と悩ましめており、さらに「執念き」様子が強調される。とはいえ、加持が続けられるうちにその効験が発揮され、もののけも調伏さ

れつつある。泣き苦しむ葵の上は加持を緩め、光源氏との面会を求めるが、これは靈物が葵の上の口を通して語るものである。「さればよ」以下は、近侍の侍女たちの発語ないし心内語ととる解釈もあるが、池田節子氏は、敬語の伴わない「あるやうあらん」という表現が女房のものとしては乱暴であることを指摘し、験者の発言であると述べており、⁽²⁶⁾首肯される見解である。この場面については『榮花物語』後くめの大将巻の以下の描写が参考になるだろう。

例はさもなきに、御みづからもののけただ出で来に出で来れば、いとかたはらいたしと思しめして、「なほ人に移さばや」とのたまはずれど、そこらの僧心を合せてのしり、加持まりて、こと人に移せど、なほ御心地同じやうなれば、集まりて加持まるるほどに、例もつきならひたる女房に小松僧都現れて、「この加持とめよ。あなかしこあなかしこ、あやまつな。ただひき声を読めひき声を読め」と言へば、殿、「このもののけのかくいふに、あるやうあらん。この加持とどめて、経なれ経なれ」とのたまはず。(榮花物語②三八一)

治安四年正月、藤原教通の妻である公任女が男児を出産した後ももののけに患い、ヨリマシ加持が行われる際の描写である。「御みづからもののけただ出で来に出で来れば」とあり、病者本人の口

を通して霊物が語っている。その後、小松僧都の霊が女房にとりつき、加持の中止を訴えると、教通がそれを受け入れて「あるやうあらん」と述べている。この後、教通の指示により、加持から引声の読経に切り替えられている。

これと同様に、『源氏物語』における「あるやうあらん」の発言も、葵の上の口から出た発話がものけによるものと見抜いた験者らによるものとみておきたい。しかし、『源氏物語』では、直後で左大臣や大宮たちがものけではなく葵の上自身の発話として理解しているし、光源氏も自らが対面しているのは葵の上だと思いついて話しかけており、験者たちと認識が食い違っていることになる。

このように、直面したもののけに対する認識が当事者の中で異なることは十分に起こりえたはずである。『源氏物語』若菜下巻では、紫の上が「絶え入」った後、御修法の壇が壊され、僧侶たちが帰り支度を始めている頃、光源氏が「もののけのするにこそあらめ」(④三三四)と言²⁷い、験者たちに加持をさせているが、修法を行っていた僧侶たちの判断よりも源氏の方が正しかったことになる。また、史実では以下のような事例を挙げることができる。万寿二年に道長の娘の嬉子が出産の際に赤斑瘡(現在の麻疹か)に感染し、加持をすべきか否かが問題になった。僧侶たち

は加持を嫌がったが、道長の判断によって加持を行うことになった。しかし、嬉子は男児を出産した後に亡くなってしまい、道長も加持を行ったことを後悔したという²⁸。病因がものけでなかったために、加持が適切な治病とみなされなかったのである。

不可視な存在であり、僧侶や験者らも確実に対処できるとは限らないものけ(及びそれに類する病気)は、それに直面した人物たちによって解釈が分かれることも自然であったのだろう²⁹。葵巻では、この後光源氏が葵の上にとりついているのが六条の御息所の生霊であることに気づくが、「人々近う参るもかたはらいたう」(②四〇)とあり、周囲の女房たちに聞かせまいとしているため、光源氏のみがその存在を見聞きしているかのようなのである。ここから、光源氏の見た幻覚であるという読みが生じることにものなるが、この場面でもものけに直面している源氏、左大臣・大宮、験者、近侍の女房らのものけについての認識や理解は区別されているのかもしれない。そして、験者らの判断が描かれないことで、ものけの正体に一層曖昧さがもたらされている。

第四節 葵巻におけるものけ(3)

右にみた場面の直後では、六条の御息所の生霊が葵の上の身を乗っ取って光源氏に語り出す。緊迫感に溢れた場面であり、『源氏

物語』におけるもののけ描写の白眉である。この場面は、それ以前の文学や記録類に具体的に描かれた例をほとんど見出すことのできない生霊を登場させたという独自性⁽³¹⁾に加え、ヨリマシ加持が行われているにもかかわらず、ヨリマシを介さずに霊が語っているという点でも注目される。ただし、霊物がつく対象を乗っ取って語る例は古記録等にも見出せる。⁽³²⁾『日本霊異記』には病者を治療する際に、霊物が病者の口を借りてとりついた原因を語り出すという例がみえる。例えば、下巻第二は、紀伊国牟婁郡熊野で病に苦しむ者がいた時、禪師永興が「咒」(陀羅尼読誦などの儀法)⁽³³⁾すると、狐の霊が病者にとりついて、自らが殺されたという恨みを語り出すという話である。⁽³⁴⁾ヨリマシ加持の定着以前の段階では、このような例がしばしばあったと考えられる。先述のように、ヨリマシ加持の定着は一〇世後半とみられており、『源氏物語』成立の時期からそれほど遡らない点には注意する必要がある。若菜下巻では、紫の上にとりついた六条の御息所の死霊が「小さき童」に駆り移されて語っているが、葵巻における展開の方が『源氏物語』成立の段階では馴染み深いものだったのかも知れない。

こうして葵の上にとりついていた霊の正体が六条の御息所であることが判明した後、物語は出産の場面へと移っていく。

かき起こされ給ひて、ほどなく生まれ給ひぬ。うれしと思す

こと限りなきに、人に駆り移し給へる御ものけどもねたがりまどふけはひいともの騒がしうて、後のことまたいと心もとなし。言ふ限りなき願ども立てさせ給ふけにや、たひらかに事なりはてぬれば、山の座主、何くれやむことなき僧ども、したり顔に汗おし拭ひつつ急ぎまかぬ。多くの人の心を尽くしつる日ごろのなごりすこしうちやすみて、今はさりとともと思す。(②四一)

出産の瞬間にはヨリマシ加持が再開されており、ヨリマシに移されて複数のもののけが現れ、「ねたがりまどふ」様子を見せて大騒ぎをする。これに類似する描写は『紫式部日記』の彰子出産記事にも見られ、「御ものけども駆り移し、かぎりなくさわぎののしる」(寛弘五年九月十日条)、「今とせさせ給ふほど、御ものけのねたみののしる声などのむくつけさよ」(同十一日条)とある。出産の瞬間には、心誓・「そうそ(妙尊か)・尋覚・「ちそう(千算か)・念覚・叡効ら験者たちとそれに近侍する女官たちが列挙され、験者がヨリマシに「ひき倒され」⁽³⁵⁾るなどして、現場は混乱を極めている。もののけたちの最後の断末魔がこだまする、ヨリマシ加持のクライマックスの瞬間といえるだろう。一方、『源氏物語』ではこの場面でのもののけ対処を詳述していない。あくまで六条の御息所の生霊出現場面に重点を置いた語りなのである。

後産まで無事に済んだ後、験者たちは帰っていくが、「したり顔に汗おし拭ひつつ急ぎまかぬ」姿はいかにも滑稽で、先述した『枕草子』における戯画的に描かれた験者たちに通じるものがある。ただし、ここでの験者たちの行動は、この後の葵の上の急逝の際、夜半の出来事だったこともあり、「山の座主、何くれの僧都たちもえ請じあへ給はず」(②四六) という状況であったことにつながるものである。単なる諧謔的描写に留まらず、葵の上の人々の弛緩した様子とともに、葵の上の死に向かって周到に設定されている。

葵の上の死の瞬間は、「殿の内人少なにしめやかなるほどに、にはかに、例の御胸をせきあげていといたうまどひ給ふ。内裏に御消息聞こえ給ふほどもなく絶え入り給ひぬ」(同)と描かれている。「御胸をせきあげて」とあるのは、以前に「胸をせき上げつついみじうたへがたげにまどふわざをしたまへば」(②三三)とあったのと同様、もののけを原因とする発作である。⁽³⁶⁾しかし、葵の上の死を直接もののけと関連づけた描写はなく、「御ものけのたびたび取り入れ奉りし」、すなわちもののけによる一時的な仮死状態⁽³⁷⁾であろうと期待されて枕返しもせず⁽³⁸⁾にいたとある。ここにおいて、験者不在のためヨリマシ加持は行われることがなく、葵の上をとり殺したもののけの正体は、六条の御息所の生霊の可能性も含めて、

やはり臚化されることとなる。物語は意図的にもののけについての解釈を決定することを避けているかのようである。

結

以上、『源氏物語』葵巻のものけについて、加持の描写を中心に検討した。『源氏物語』は史実や先行の文学を踏まえたり、そこから離れたりして、加持やそれをとり行う験者たちの姿を活写している。また、加持の場面でその場にいる人物たちや、その判断や認識について描くことと描かないことを峻別することで、ものけの解釈について多様な読みを生む、曖昧模糊とした世界を作り出している。

序で述べたように、他分野のものけ研究の進展は近年もめざましく、記録類や歴史物語のみならず、漢訳経典や僧伝などの仏教資料や寺社縁起、中世の説話、絵巻などのもものけ関連の資料が新たに提示されている。これらの成果の全てを取り込むことは到底できなかつたが、『源氏物語』に還元できる余地はいまだ少くはないと考える。今後の更なる課題としたい。

注(1) 従って、「ものけ」は「物(の)怪」と表記するのが一般的であるが、原義的には「物の氣」と表記すべきであり、記録類では怪異・変異・天変地異などを意味する「物怪(ブツカイ)」と

区別され、「邪気」「物気」「靈気」がこれに当たる。本稿は、「もののけ」の表記で統一する。藤原克己「もののけ・御霊」（『国文学』一九八五・九）、森正人「もののけ」と物怪」（『古代心性表現の研究』岩波書店、二〇一九）等参照。

(2)

代表的なものとして、西郷信綱『増補 詩の発生』（未來社、一九九四。初版は一九六〇）、藤本勝義『源氏物語の〈物の怪〉文学と記録の狭間』（笠間書院、一九九四）、三田村雅子・川添房江編『源氏物語をいま読み解く3 夢と物の怪の源氏物語』（翰林書房、二〇一〇）、注1森書など。また、森正人氏は、近時『源氏物語葵巻の〈もののけ〉表現』顕露まで」（『国語国文』九〇巻二二号、二〇二二・一一）、『源氏物語葵巻の〈もののけ〉表現―顕露以後』（『国語と国文学』九九巻二二号、二〇二二・一一）、『源氏物語』若菜下巻の〈もののけ〉について」（二〇二二年度紫式部学会講演会における講演、二〇二三・一一）と立て続けに研究成果を発表されており、本稿も大きな示唆を得ている。

(3)

代表的なものとして、山折哲雄『日本人の靈魂観 鎮魂と禁欲の精神史』（河出書房新社、二〇一一。初版は一九七六、また改訂版が一九八八）、小松和彦『憑霊信仰論 妖怪研究への試み』（講談社、一九九四。初版は一九八二）、小松和彦『悪霊論』（ちくま学芸文庫、一九九七）、酒向伸行『憑霊信仰の歴史と民俗』（岩田書院、二〇一三）、谷口美樹『平安貴族の疾病認識と治療法―万寿二年の赤斑瘡流行を手懸りに』（『日本史研究』三六三号、一九九二・一二）など。

(4)

上野勝之『夢とモノケの精神史―平安貴族の精神世界』（京都大学学術出版会、二〇一三）、小田悦代『呪縛・護法・阿尾著法

―説話にみる僧の験力』（岩田書院、二〇一六）、小山聡子『もののけの日本史』（中央公論新社、二〇二〇）、徳永誓子『憑霊信仰と日本中世社会』（法蔵館、二〇二二）など。また、医療面からみたもののけの研究として、小山聡子『平安時代におけるモノケの表象と治療』（小山聡子編『前近代日本の病氣治療と呪術』思文閣出版、二〇二〇）、瀬戸まゆみ『王朝時代の実像3 病悩と治療 王朝貴族の実相』（臨川書店、二〇二二）など。

(5)

今井源衛『おのがいとめでたしと』考』（『今井源衛著作集 第二巻』笠間書院、二〇〇四）、渡辺泰宏『おのがいとめでたしと見奉るをばたづね思ほさで―その解釈ともののけの正体』（『中古文学』一九九〇・一一）など。

(6)

藤本勝義『源氏物語の物の怪 生霊をめぐる』（注2書）、吉田幹生『六条御息所の人物造型―その生霊化をめぐる』（『日本古代恋愛文学史』笠間書院、二〇一五）、今井上『六条御息所生霊化の理路―“うき”をめぐる』（『源氏物語 表現の理路』笠間書院、二〇〇八）、藤井由紀子『源氏物語』の靈魂観」（『異貌の源氏物語』武蔵野書院、二〇二二）など。

(7)

森一郎『六条御息所の造型―その役割と問題』（『源氏物語作中人物論』笠間書院、一九七九）、藤井貞和『六条御息所のものけ―光源氏物語主題論』（『源氏物語論』岩波書店、二〇〇〇）など。

(8)

小松和彦『護法信仰論覚書―治療儀礼における「物怪」と護法』（注3書）。また、護法童子に関しては、小山聡子『護法童子信仰の研究』（自照社出版、二〇〇三）をはじめとする一連の論考、酒向伸行『護法信仰の変容と機能』（注3書）、徳永誓子『護法童子考』（注4書）など。

- (9) 上野勝之「ヨリマシ加持の登場 その成立と起源」(注4上野書)。なお、ヨリマシ加持の用語は本書による。
- (10) 徳永誓子「ヨリマシと験者」(注4書)
- (11) 注4小山論文
- (12) 『うつほ物語』本文の引用は室城秀之『新版 うつほ物語 現代語訳付き』(角川ソフィア文庫、二〇二二)続刊中)による。ただし、私に本文の表記を改めた。
- (13) 徳永誓子氏は、淨蔵のように女性と関係を持つ破戒の振る舞いが一〇世紀から験者に許されたとかつて唱えたが、その後、佐藤愛弓「験者の肖像―余慶とその弟子たち」(『山辺道』五八号、二〇一八・二)を受けて修正している(「古代・中世の験者」注4書)。験者全体に一般化できるわけではないけれども、一部の験者において、俗的一面が描かれる類型があつたことに注目しておきたい。
- (14) 他に、一五一段ではもののけの調伏に苦戦する験者が「入笑はれならじ」と懸命に祈る姿が「苦しげなるもの」とされている。
- (15) 池田節子「葵の上の出産場面と出産描写史」(『源氏物語の表現と儀礼』翰林書房、二〇二〇)は、当該場面が「源氏物語」葵巻の葵の上の出産場面に類似することを指摘する。
- (16) 『新編日本古典文学全集』の解説で、仲忠は「何物にも替えがたい配偶者として女一の宮個人と向き合ひはじめ」、「俊陰の娘や思慕し続けた藤壺と適切な距離がとれるようになった」とし、女一の宮の出産を通じて、仲忠の人物像に変化が見られるとする。周知のように、その正体をめぐっては、六条御息所(あるいは周辺の人物)の霊とする説と廃院に棲む妖物とする説などが古来より対立している。
- (17) 以下、『源氏物語』及びその他の中古文学本文の引用は、『新編日本古典文学全集』(小学館)により、巻数・頁数を記した。ただし、私に表記を改めた箇所がある。
- (18) 「日本古代・中世における瘧病認識の変容」(注4上野書)。また、瘧病に関して、注4瀬戸書も参照。
- (19) 注19上野論文の指摘による。
- (20) 「源氏物語」夕顔」巻某院の怪」それは(ものけ)ではない」(注1森書)
- (21) 『紫式部日記』における彰子の出産記事では、「陰陽師」が「世にあるかぎり召し集め」られて祈祷を行い(寛弘五年九月十日条)、出産後には「薬師・陰陽師など」が禄を賜っている(同十一日条)。『御堂関白記』の同日条にも「午時平安男子産給、候僧・陰陽師等賜禄、各有差」とある。
- (22) 藤本勝義「物の怪の史実・記録と源氏物語」(注2書)
- (23) 『紫式部日記』寛弘五年九月十一日条にも、調伏に苦戦する阿闍梨について「阿闍梨の験のうすきにあらず、御もののけのいみじうこはきなりけり」とある。
- (24) 『新潮日本古典集成 源氏物語』(新潮社)、『新日本古典文学大系 源氏物語』(岩波書店)等。
- (25) 注15論文。また、藤本勝義「すこしゆるへ給へや。大将に聞こゆべきことあり―葵上が話す生霊の言葉」(『国文学 解釈と教材の研究』臨時増刊号、二〇〇〇・七)も参照。
- (26) もののけは人を仮死状態に陥らせるが、そこから蘇生させることもできると考えられていた。(注2森論文二〇二二参照)
- (27) 『小右記』万寿二年八月五日条に「尚侍煩赤班(ママ)瘧之間有産氣、可有加持哉否事持疑云々……然而諸僧不能加持、依恐神
- (28)

気云々、禪閣先加持、其後諸僧加持、調伏邪氣」とあり、同八日条に道長は「加持事深有悔色云々」であったと記されている。赤斑瘡罹患時に加持を避けるべきことは、注3谷口論文、上野勝之「撰関期の王権と邪気観念―藤原道長の邪気観念」(注4書)参照。

(29) 『夜の寢覚』巻四では、男君の妻である女一の宮にとりついたもののけが寢覚の上の生霊であると名乗る事件が起こる。男君はこれを信じずに「ものぐるほしき狐」の偽りであると主張する一方、女一の宮の母の大皇の宮は寢覚の上の生霊であることを疑わない。結局、もののけの正体は明かされることはない。

(30) 幻覚説・非幻覚説については、注2森論文二〇二二の整理を参照。『源氏物語』における生霊描写の独自性とその発想の淵源については、前掲注6に掲げた一連の研究を参照。

(32) 『権記』長保二年五月二十五日条では、もののけが藤原道長を乗っ取り(「邪霊領得」)、伊周の復位・復官を一条天皇に奏するように訴えるという事件が記されている。

(33) 酒向伸行「仏呪と治病」(注3書)

(34) 病者託曰、「我是狐矣。無用不伏。禪師莫強」。問之「何故」、答「斯先殺我。我報彼怨。是人纒死、生大殺我」(「生物の命を殺して怨を結び、狐と狗にとりて互に相報いし縁」。この狐の霊は調伏されずに病者をとり殺してしまふ。また、下巻第三十六、病者が死霊にとりつかれる話載る。藤原永手が仏罰を犯して死んだ後、息子の家依が病を得る。それに対し、禪師が誓願し陀羅尼を唱えると、家依に永手の霊がとりつき、生前の罪について告白し、死後に地獄に墮ちていたことなどを告げる。『日本霊異記』では、霊や鬼、神がとりつくことを「託(くるふ)」と

表現している。

(35) ヨリマシがもののけに引き倒されたとする解釈もある(『新編日本古典文学全集』)が、山本淳子訳注「紫式部日記 現代語訳付き」(角川ソフィア文庫)他に拠った。

(36) 藤本勝義「六条御息所の死霊」(注2書)が指摘するように、発病した紫の上にも「御胸をなやみ給ふ」(若菜下④二二二)、「胸は時々おこりつわづらひ給ふさま、たへがたく苦しげなり」(同二二三)と「胸」の症状が表れている。また、夕顔巻で夕顔の死に直面した源氏について「見棄てて行きあかれにけりとつらくや思はむ、と心まどひの中にも思ほすに、御胸せき上ぐる心地し給ふ。御頭も痛く、身も熱き心地して、いと苦しくまどはれ給へば」(①一七三)と描写されている。傍線部については、「強い後悔の念」(『新全集』)といった心情を表すものと理解されるが、もののけに関連する表現とみることでもできるだろう。

(37) 前掲注27参照。

〔付記〕

本研究はJSPS科研費P20K13886の助成を受けたものです。また、本稿執筆にあたっては、フェリス女学院大学で二〇二三年度「日本語日本文学プレ専門ゼミ」で受講生たちとおこなった葵巻の講読に大きな示唆を得ています。受講生諸氏に深く感謝します。